公的自己意識が授業中の携帯電話における迷惑行動に及ぼす影響

○栗林克匡

(北星学園大学社会福祉学部)

キーワード: 携帯電話、社会的迷惑、公的自己意識

The influence of public self-consciousness on inconsiderate cell-phone use in the classroom

Yoshimasa KURIBAYASHI

(School of Social Welfare, Hokusei Gakuen Univ.)

Key Words: cell-phone, social inconsiderate behavior, public self-consciousness

目 的

携帯電話の使用マナーに関する意識は多様であり、同じ公共空間でも、場所によってマナー意識に「合意のできている」ところと「合意のできていない」ところがある(三上, 2001)。使用してはいけないという合意のできている場所は、病院などの安全の配慮や静寂さを保つ必要のある場所だという共通点があるが、合意のできていない場所では、「電車やバスの中」「レストランの中」「職場で勤務中」などが挙げられている。大学生にとって授業中の携帯電話使用も十分な合意が得られているとはいえない。教室で大人数で行われる授業は、匿名性が高く、互いに接近した状態で長時間居合わせ、被害を回避できない場所といえよう。このような場所での迷惑行為の抑制には個人差が存在すると考えられる。特に他者の目を強く意識する公的自己意識が高い者は社会的迷惑行為を抑制すると考えられる。本研究では、大学生の授業中の携帯電話使用の程度と、使用に対する迷惑認知について公的自己意識を考慮しながら検討する。

方 法

調査対象者: 大学生 108 名 (男性 33 名、女性 75 名)。平均年齢は 19.72 歳(SD=0.88)であった。

質問紙の構成:

(1)携帯電話の使用実態: 所有歴、携帯の通話・メール・ゲームの使用時間と頻度などを尋ねた。(2)授業中の携帯電話の迷惑行動および迷惑認知: 本調査の前に、大学生 45 名 (男性 5 名、女性 40 名) に、授業中の携帯電話使用に関して「迷惑だと思うこと」「気をつけていること」を自由記述で回答させた結果を参考に、20 項目を授業中の携帯電話の迷惑行動・認知尺度として採用した。大学の授業中の状況を記述した文章を読み(100 名ほどの出席者で、周りに知っている人がいない状況)、そのような状況下での自分自身の迷惑行動の程度について、どの程度その行動を思うかかを「絶対しない(1)～必ずする(4)」の 4 段階で評定させた。また同 20 項目を用い、迷惑の認知についてあなたがどの程度迷惑だと感じるかということ「全く迷惑にならない(1)～非常に迷惑になる(7)」の 7 段階で評定させた。(3)公的自己意識: 菅原(1984)の自意識尺度から公的自己意識に関する 11 項目を 7 段階で回答させた。

結 果

まず迷惑行動の程度 20 項目について、主因子法プロマックス回転による因子分析を行った結果、7 因子が抽出された。第 1 因子は、「10. マナーモードのバイブを鳴らす」「2. この授業中はサイレントマナーモードにする(音もバイブも鳴らない状態)(逆転項目)」「11. 机の上でマナーモードのバイブを鳴らす」「1. この授業中はマナーモードにする(音は鳴らない、バイブは鳴る状態)」の 4 項目で、「バイブ鳴動」因子とした。第 2 因子は、「4. この授業中にかかってきた着信には出る」「7. 着信があった場合、電話には出ずに授業後にはかけなおす(逆転項目)」「3. この授業中に通話をする」「6. 着信があった場合、電話に出ながら退室する」の 4 項目で、「通話」因子とした。第 3 因子は「13. 先生に見えないように携帯電話を使用する」「14. 周囲の人に見えないように携帯電話を使用する」の 2 項目で「隠れて使用」因子とした。第 4 因子は、「16. 携帯電話内のゲームで友達と騒ぐ」「15. 授業中に携帯電話内のゲームで遊ぶ」の 2

項目で、「ゲーム遊び」因子とした。第 5 因子は、「8. この授業中に着信音を鳴らす」「9. この授業中に音を鳴らす(アラーム音など着信音以外)」の 2 項目で「着信音鳴動」因子とした。第 6 因子は、「18. 携帯電話の電源を切っておく」「19. 授業中は緊急時以外携帯電話を使用しないようにする」の 2 項目で、「電源オフ」とした。第 7 因子は、「17. 携帯電話を時計代わりとして使用する」の 1 項目のみで、「時計代わり」因子とした。各因子を構成する項目(因子負荷量: 40 以上のもの)の平均値を以下の分析に用いた。なお、同 20 項目を用いて迷惑認知の評定も行ったが、迷惑行動の程度と対応させやすいように、そのまま同じ因子で迷惑認知得点も算出した。

次に迷惑行動の程度および迷惑認知の各因子得点を従属変数、公的自己意識を独立変数とする 1 要因分散分析を行った(表 1)。公的自己意識は、平均値(54.95)を基に高群と低群に分けた。迷惑行動の程度については、公的自己意識の高群が低群よりも、「隠れて使用(F(1, 103)=4.06, p<.05)」「時計代わりの使用(F(1, 103)=3.27, p<.10)」の得点が高かった。迷惑認知については、公的自己意識の高群が低群よりも、「バイブ鳴動(F(1, 103)=6.76, p<.05)」「通話(F(1, 103)=6.30, p<.05)」「着信音鳴動(F(1, 103)=3.21, p<.10)」の得点が高かった。また「電源オフ(F(1, 103)=4.77, p<.05)」の得点は、高群の方が低群よりも低く、迷惑と思っていないようである。

考 察

大学生の授業中の携帯電話使用に関する迷惑行動を見ると、大抵の人は使用は控えていることが窺える。しかし完全に電源をオフにすることは少なく、特に公的自己意識の高い者は、周囲の人の目を気にしつつ、時計代わりの使用や隠れての使用をしているようである。迷惑認知に関しては、着信時の音や振動、話し声など騒音となるような使用については迷惑であると感じやすいようである。興味深いのは、公的自己意識の高い者は低い者よりも騒音がでる使用は迷惑だと感じやすいのに、実際の自分の行動は高低群間で差異は見られていない。隠れての使用については迷惑度をそれほど高く認知していないが、そのような行動は、むしろ公的自己意識が高い者の方が行っている。公的自己意識の高い人は、周囲の様子を窺い、迷惑をかけない範囲で最大限、携帯電話を使用するといえよう。

表 1 公的自己意識群別の迷惑行動の程度および迷惑認知の平均値・SD・F 値

	迷惑行動の程度(4段階)			迷惑認知(7段階)		
	公的自己意識 低群	公的自己意識 高群	F 値	公的自己意識 低群	公的自己意識 高群	F 値
バイブ鳴動因子	2.00 (0.84)	2.06 (0.90)	0.11	4.73 (1.01)	5.26 (1.04)	6.76 *
通話因子	1.45 (0.46)	1.41 (0.41)	0.21	5.68 (1.04)	6.10 (0.69)	6.30 *
隠れて使用因子	2.52 (0.66)	2.80 (0.70)	4.06 *	2.74 (1.80)	2.55 (1.65)	0.31
ゲーム遊び因子	1.57 (0.60)	1.69 (0.59)	1.06	4.30 (1.44)	4.41 (1.39)	0.17
着信音鳴動因子	1.17 (0.39)	1.23 (0.36)	0.64	5.45 (1.53)	5.95 (1.30)	3.21 +
電源オフ因子	1.76 (0.60)	1.73 (0.64)	0.07	2.14 (1.54)	1.58 (1.06)	4.77 *
時計代わり因子	2.98 (0.90)	3.28 (0.80)	3.27 +	2.23 (1.60)	1.85 (1.34)	1.70

※()はSD

本研究では新見真由さんの協力を得ました。記して感謝いたします。

*p<.10

*p<.05